

第 16 回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「影隠し」

岩手県立水沢高等学校三年 佐藤 礼菜



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞

『影隠し』

岩手県立水沢高等学校三年 佐藤 札菜

——美鈴ちゃん、こつちだよ。

空のオレンジ色と藍色が混ざり始める時間。学校が終わって、お菓子屋さんでお買い物をした帰り。学校や会社帰りの人や、お買い物をしている人、いろんな人の話し声でいっぱいになつてている商店街で、私はふと立ちどまつた。知つてゐる声が聞こえたような……。周りを見ると、スーツや制服を着た人達のすきまに、ちつちやな白と茶色の模様が見えた。いつも世話してゐるノラ猫のミケだ。

「ミケ、どうしたの？」

駆け寄ると、ミケはちらつと金色の日を私に向けて、裏通りに向かつて歩きだしてしまつた。街のにぎやかさが嘘みたいに静かで、暗い通り。何かあるの、と聞くと、「じいから、つこてきなよ」とミケは古びた鳥居をぐぐる。ずっと昔からあるのが、鳥居はすっかり色が薄くなつていた。こんな場所あつたんだ。首をかしげながら、私は鳥居をぐぐつた。

その瞬間、ふつと空気が変わつた。しゃぼん玉の中つて、きつとこんな感じなんだろうな。今まですぐそばにあつた街の人の声とか、明かりとか、みんな一気に遠くに行つちゃつたみたい。冷たいつんとした空気は、花の香りがする。椿の花だ。ふつぐらした赤色とツヤツヤの葉っぱが闇の中に浮かんで、とつてもきれい。こんなすてきな場所があるなんて。よく見てみると地面は石畳になつていて、椿に挟まれた道はまつすぐ奥まで続いていた。ミケがするりと脇をすりぬける。

「あ、まつてよ！」

あわてて追いかけしていくと、ぽつぽつと黄色い明かりが道の両脇に浮かび始めた。まるで歓迎してくれてゐるみたいだけど、私からしたらそれど「いやない。ほんのり照らされた道を、私は一所懸命にミケを追いかけた。でも、相手はすばしっこい。学校帰りで制服だから動きづらっこし、あつとい





間に引き放されて、私はすっかりくたばくなつた。よひよひ歩いてくると、しばりくして、「やつと来たのね」と声が聞こえた。明かりに照らされる、白と茶色のふわふわな体。ミケはちよこんとお行儀よく座っていた。嬉しそうにしつぽを揺らしていて……誰かいるのかな?

私はゆっくり近付いてみた。すると、

「おやおや、珍しいな。こんな所に人が来るとは」

少しかすれた、でも凜とした声がした。あれ、と思つて田をすつてみると、明かりに照らされた闇の中に、男の人が立つていた。

真っ黒い髪に、真っ黒い着物、真っ黒い目。その中の闇をかき集めたみたいな人だった。足元にミケがすり寄るまま、その人は私を見てにいつと笑つた。明かりに照らされた顔には田元や口元にしわがあるけど、背筋はしゃんとしているから、おじいさんのかおじさんのかよく分からぬ。おじさんかな。何だか、とってもなつかしい感じがした。会つのは初めてのはずなのに。なんでだろ?

「私、美鈴っていうの。その子、ミケがね、こゝに来てつてゆくから、ついてきたの」

つい嬉しくなつてこゝにあると、田を丸くされる。そしてすぐに、ふき出して笑われた。驚いたけど、おじいさんの笑つてこゝ顔を見てこゝに私も嬉しくなつてきた。

「いや、すまんすまん。お前さんがあんまり嬉しそうにするものだから、移つてしまつた。ワタシほの先にある社に住んでいる者でな、まあ好きに呼んでくれ。……そうだな、立ち話もなんだし、つこておいで」

しばりくして、おじさんは涙を拭いながら手招きした。私はミケを抱っこして、その後についていく。何て呼ぼう……そうだー。

「じゃあ、『師匠』って呼んでもうこー。」

「それはかまわんが……なんでもまた」

私が横に立つてたずねると、おじさんがきょとんとした。私はちょっとと由慢げになる。

「だつて、『師匠』って感じだもんー。」



着物とか、しゃべり方とか、そんな感じがしたし、本当に何か教えてもらひえそうな気もした。師匠はふつと笑つて、そやか、とつぶやくみたいに言つた。

そうしてじるつちに、お社が見えてきた。黒い瓦屋根で、木で出来ている。でも小さめで、寝るぐらじしかできなそう。こりに一人でいるのかな?なんて考へていると、がたつぐの口を師匠が乱暴に開けた。石造りの中からは明かりが漏れてきていて、師匠の後から入つていくと、ミケが耳を動かした。畳の敷かれたお座敷のといねどいに置かれた燈籠とうろうが、赤や黄色にほんのり光つて、影を作り出している。その奥の方から、手の平に乗るぐらじの黒い人影がわんさか出てきたものだから、ミケはびくべくしたみたい。

「かわいい! 師匠、この子達は?」

私が持つているお菓子の入つた袋に向かつて、ぴょんぴょん飛び跳ねる人影達。ミケはじつとこちらでいるけど、とってもかわいい。

「名前はないんだがな、こりに住む小さい影達だよ。少しばかりやんちやだがな」

師匠の説明を聞きながら、アメの入つた袋を開ける。影の子達がじつと見てきた。

「わつちやな影の子達? じゃあ……『影つ子』! 皆にあげる!」

私はそう言つと、袋からアメをひとつそり取つてふわっと手を広げた。赤、青、緑、ピンク……。カラフルなアメが揺らめく灯りにツヤツヤ輝く。降ってきたアメを、影つ子達はぱしつと両手で受け取つた。わつちやな手を差し出してきて、ちゃんとハイタッチしてくれる。何だか嬉しそう。「師匠にもあげる!」

アメの一つを差し出す。師匠は一粒、ピンクのアメをつまみあげて、まじまじと見つめた。口に放り込む。じぱりぐの口の中で、ぐるぐる転がして、師匠は目を丸くした。真つ黒い目がきらきらしてくる。

「……うまいな。それに、とてもきれいだった。ありがとさん」

師匠がふわっと笑う。私は「どういたしまして!」と大きくうなずいた。

私はそれから、師匠の所へ行くよになつた。一人じゃ心配だからつて、ミケも一緒についてきてくれる。師匠も影つ子もお菓子が好きみたいだから、



お菓子を食べながら、色々話すんだ。静かで、優しい感じがして、落ち着くし、師匠と話していろと楽しかった。良かった」とも、良くなかった」とも、師匠は笑って聞いてくれる。影っ子と//ミケも仲良くなつた。楽しげ、優しい、ステキな時間。

「それでね、響ちゃんも不思議なお話を好きなんだって。」「うーんの、初めてなのよ」

今日は、クラスメートの響ちゃんをお話をした」と話をした。クラスの子達とはあんまりお話をしたことがなかつたけど、図書室で本を読んでいたら、その本いいよね、って。嬉しかつた。あんな風にほかの子と樂しへお話をできたことなんて、なかつたから。

「皆、お化けだと動物がしゃべるとかばかしい、変な子って。小学校の時から私のお話を聞いてくれた人なんていなかつたのに。響ちゃんは、ちゃんと聞いて、お話をてくれたの。それでね、//の」とも話をしたら、来てみたいって」

今度連れてきてもいい? やつ聞くと、ミケをなでる師匠の手が止まつた。でもすぐにほほえんで、「ああ」とうなずいてくれる。胸がジーンとした。ミケの丸まつた体に乗つていた影っ子がぴょんと飛び降りて、ちつちつな手を差し出してくれた。何回かの、かわいいハイタッチだつた。

「これとか、どうかな?」

お休みの日になつて、私は師匠達にあげるお菓子を響ちゃんと選んでいた。カラフルなものが好きみたい、と私が言つと、響ちゃんが金平糖の入つている袋を取つた。星の形をしていて、青とか白とかあつて、ぴつたりだ。いいね、と私はうなずいた。よく見せてもらおうと手を伸ばして、引っ込める。前に影っ子に触つた時ついたのが、指先についた黒色がどうしても取れなかつたんだ。ま、そのうち取れるよね。とりあえず一人で金平糖を買って、鳥居の前に行く。響ちゃんが鳥をのんだ。

「毎回なのに、やっぱつ//だけ暗いな」

「うん、でも、進んでこくと燈籠があつて明のこよ~、師匠のお社も」



私が笑うと、響也くんはお菓子の入った袋を握りなおした。そして、私達は鳥居をくぐった。ふつと音が遠くなる。進んでいくと、灯つていて、燈籠に、響也くんはきよろきよろしながら歩いていた。今日は猫の集会があるから、ミケはない。影つ子はちょっとひとり寂しがるかもしれないけど、響也くんがいるから、大丈夫かな。なんてことを考えながら歩いていると、響也くんに話しかけられた。

「美鈴はさ、……怖くないの？」

「なんで？ 師匠は悪い人じゃないし、怖いことなんてないよ？」

私は首をかしげる。響也くんは「そっか」と聞いて、ちょっとうつむいた。「僕、何のとりえもない『普通』なヤツだからや、いつもこのわくわくして、来てみたんだけど。やっぱり、……正直怖くて」

胸がズキッとした。今までそうやって、みんな私の話を聞いてくれなかつた。むしろ、なんでみんなには動物とかお花の声が聞こえないのか、お化けが見えないのか分からなかつた。ちゃんと耳をすませば、見ようとすれば、仲良くなれるのに。そんなの変、不気味だつて、私の話を聞いてくれない。響也くんもやっぱり怖いんだ。そう思つと、寂しくなつた。……皆、私と同じなりじこのにな……。

だから、と響也くんが何か言いかけた矢先、師匠の声がした。いつの間にか着いていたみたいで、お社の前に師匠が立つてゐる。

「いらっしゃい。……君が響也くんか」

「……は、初めてまして。おじゃまします」

おじぎする響也くんに、師匠がこっそり笑う。お社に入つて、私は、あれ、と首をかしげた。いつもは出迎えてくれる影つ子達がいない。恥ずかしがつてゐるかな、なんて思つたけど、私がそれを聞く前に、師匠が響也くんをさつさと案内し始めてしまつた。あわてて私もお座敷に上がる。机につくと、響也くんがハツとしたように袋を師匠に差し出した。

「あの、これ。美鈴と選んだんですけど」

やつぱり緊張しているのが、忘れてたみたい。おずおずと響也くんが差し出すと、師匠が、「何だか悪いなあ」と受け取つて中身を見た。

「師匠達カラフルなものが好きみたいつて言つたら、響也くんが選んでくれたのよ」



私が教えると、響也くんが「いや」と鼻を搔いた。師匠は「ありがとやん」と笑った。

そして、笑顔のまま師匠が手招きした。

「美鈴、おいで」

何だろう。不思議に思いながら師匠の横に座ると、ぐこっと手を引っぱりれた。ちょっと痛くて、顔をしかめる。

「ううん……やはりか」

私の手を見て、師匠がうなる。文句を言おうとしたけど、あんまり難しい顔をしてるから不安になつた。どうしたの、と聞くと、師匠は手を離して前髪をかきあげた。

「……影っ子達がつけた印が消えかけている。お前さんのせいだな？」

そう言って、響也くんをにらむ。よく分からない。引っぱられた方の手をよく見てみると、影っ子とハイタッチしていた指先の黒が薄くなつていた。でも、印って？

「……何の話ですか？」

響也くんもきょとんとしている。それには答へず、師匠は私の肩に手を置いて笑つた。

「美鈴は」の場所が好きなんだの？ だがな、響也くんは違つみたいたゞ。

「……そうだ、せつかぐだから今日は昔話をしよう」

師匠がそう言って手を叩いた瞬間、部屋の灯りが弱くなつた。影が濃くなつて、その中に突き飛ばされる。何が起きたのが分からなくてとりあえず起き上がりうとすると、ぐつと服を引っぱられた。影っ子達がぐいぐいと私を引き止めてくる。それを見て驚く響也くんと私に、師匠は歌うように話を始めた。

昔々、この辺りは村で、大きな森があつた。その森はうつそうとしていて、いつも薄暗かつたから「影の森」と呼ばれてみんなに不気味がられていた。この森には「影」がいて、ひつそり村を見守つていたが、あんまり人が近寄らないから、だんだん寂しくなつた。そして、村の人をやううつよくなつた。友達がほしかつたのだ。一所懸命もてなしたが、怖がられて、結局友達はできなかつた。村の人達は怒り、森の中によらわれていた人達を取り戻した。しかし、その人達から「影」の話を聞くうちに、かわいそうになつ



た。森にお社を建てて、みんなで感謝するようにした。「影」も村の人も、仲良くなつた。お互いのことを知つて、幸せになつた……。

「やがて村は街になつた。それこそ、社のことをなど忘れ去られるべつこの時間がたつてな。誰も社のことなど考へない。だから、何かと良くしてくれた美鈴の願いを叶えようと思つたのさ。昔やうつた者の中には、森の方がいといと言つてしまふになつた者もいたからな」

響也くんが田を見開いて私を見た。でも、私たつて師匠が句を言つているのか分からぬ。首を振る私の顔を、師匠がのぞきこんだ。真つ黒い田が、一瞬悲しそうに揺れた。

「それで影っ子が同じ仲間だといつ母をお前さんにつけたのだがな、響也くんのせいが、お前さんの『ソリ』にいたい』といつ気持ちが少しばかり薄くなつてしまつた。そんな中途半端じやあ、ワタシ達と同じにはなれない」「……師匠、だつけ。師匠がその詠の『影』だとでも言つたいの? 結局、師匠は美鈴や僕をどうしたいのさ?..」

響也くんが眉をひそめる。師匠はゆつべつと響也くんの方に体を向けた。「せつかく」を訪ねてくれたのだから、すつとこでもらわないとな。人が来るなんて、めつたにないのだから

どうしよう。響也くんを巻き込んでしまつたし、影っ子達は嬉しそうだし、どうしたらいいか分からぬ。響也くんが口を開いた。

「……悪いけど、ずっとソリにいるなんてできないよ」

「ふうん? だが、お前さんに何ができる? 取り立てて何もなさやうなお前さんに」

師匠が響也くんに近付く。響也くんが尻もちをついた。その田は不安そうで、私は気付いたら「違うよー」と叫んでいた。

「何もないなんて、そんなことなじよ……、響也くんは私とお話をしてくれた、優しい人だもの。ちゃんと話を聞いてくれた人なんて、今までいなかつたのに。私、とっても嬉しかつたんだよ」

響也くんが驚いたように私を見る。私はそれにもうなずいて、そしてぞつとした。寒い。見ると、影っ子がひざに乗つっていた。お砂糖を焦こがしたみたいに、その部分がじんわりと黒くなつてゐる。師匠が私の前に立つた。

「本当にそつ思つてゐるのか?」



かがみこんで、じつと私の田をのぞきこんでくる。その田に吸い込まれるような感じがして、私は何も言えなかつた。燈籠の灯りが消えて、だんだんお座敷が暗くなつてくる。師匠は立ち上がる、静かに笑つた。

「嬉しいなどと言つてくるが、本当は寂しいんだろう? 韶也くんは美鈴とは違つ。」に来る時も、お前さんとは違つて怖がつたんじゃないか?」

「そうだ。韶也くんは優しいけど、怖がつてた。ほかの人達と同じ。また、灯りが消えた。

「ワタシにはお前さんの寂しさがよく分かる。だがな、」にいれば、ワタシ達と同じになれば、もうそんな思いはしなくてすむんだよ。なにせ、」では、皆同じだからな」

「」にいれば寂しくない。師匠の言葉はすく優しかつた。師匠は私のことを分かつてくれる。」を出る意味なんてないんじゃないのかな……。体の真ん中から冷えていく感じがして、気付くと、手やひざだけじゃなく体全體が黒くじんでいた。ちょっと寒いけど、皆同じ、真っ黒に塗り潰されたいくと思うと、何だかほつとす。皆、皆一緒。私がうなずいた瞬間、何か光が田に入つた。

「皆同じって……さつもから聞いてれば、何だよそれ。確かに、僕と美鈴は違つかど」

「響也くんの周りだけ、明るくなつていて。燈籠は消えてこつてのに、どうして? 私はまぶしくて田をそらした。

「……やめてよ。そんなの、聞きたくない」

うつむく私に、響也くんは話を続けた。

「違つかど、だから」そ美鈴の」と、すこかつて思うのに。僕も、自分なんて、何のとりえもないつまらないヤツだと思つてた。だから、皆が怖がるようなものも大切にできる美鈴がうりやましかつたんだ。でも、さつき美鈴に言つて初めて、自分にもいといいろがあるつて気付けた。美鈴が教えてくれたんだ。……一人じゃないんだ、大丈夫だよ」

小さく笑つて、響也くんは手を差し伸べた。響也くんがそんな風に思つてたなんて、思つてもみなかつた。ずっと、皆と違つて」が寂しかつた。でも、柔らかい光に、体を包む影が溶かされていく。恐る恐る手を伸ばそうとした



瞬間、肩を強く掴まれた。すぐ耳元で低い声がする。優しくて、少し寂しそうな声。

「ダメだ、そんなものはただの気休めだ。自分と違う者がいる限り、ずっと寂しい思いをするに決まっている。」にじに残れ、美鈴」

胸がキュツとした。涙が出来になるのをじりえて、私は精一杯笑った。「師匠」ありがとう。師匠や影っ子達といて、とっても楽しかった……でも、ごめんね。私がんばつてみたの。ちゃんと分かつてくれる人がいるって、分かつたから」

影っ子達が離れて行く。体の影は、すっかりなくなっていた。少しして、肩を掴んでいた手がゆっくりと離れる。

「ねえ、師匠……」

「……もういい、勝手にしろ。ただし、お前さんはこの場所にふさわしくなくなつたのだからな、もう一度と来るんじゃないぞ」

響也くんの手を取つて、立ち上がる。私は田をつぶつて、しつかりうなずいた。

鳥居をくぐると裏通りに出で、さわやかな風が髪をなでた。おかげり、といつ声と一緒に、ミケが足元にすり寄つてくる。私はその体を抱つとした。ふかふかで、あつたかい。

「美鈴、今のつて……夢とかじゃないよね」

ぽつりと響也くんがつぶやいた。でも、私は答えられなくて。響也くんはそんな私を見てきよつとした。

「美鈴、……泣いてるの?」

何か答えなきや。そう思うのに、何だか胸が痛かつた。そうだ、師匠の」と……。

「……夢なんかじゃ、ないよ。師匠はね、私達をあの場所から出してくれたんだと思うの。響也くんからしたら信じられないかもしないけど、師匠はとってもいい人だから……だから……」

大丈夫?とミケが小さく鳴いた。その体をそつと抱きしめる。そうだ、ミケが連れててくれた場所だし、昔から一緒にの子が怖い場所に私を連れてくるはずがないんだ。きっと私が寂しいのを知つてて、連れててくれた



んだ……。私が必死に涙を拭つていると、響也くんは「そっか」と小さく笑つてハンカチを差し出してくれた。

「……ありがとう」

受け取つて涙を拭^ふぐ。真っ白な太陽の光が差し込んで、地面に淡い影が落ちた。私は鳥居を振り返つた。響也くんが首をかしげる。

「どうしたの？」

「ううん、なんでもない。……もう行^いけ」

鳥居の奥の森には、太陽の光を浴びて、優しい影が静かにたたずんでいるのが見えた。